

大間原発も東通原発も暗礁に乗り上げかねない事態です 原子力マネー依存から脱却のシグナルではないでしょうか

大間原発が進まない最大の理由は、単に技術的な問題ではなく、「原子力政策の迷走」「安全審査の長期化」「社会的合意の欠如」という三重の構造的問題が絡んでいるためと言えます。このため、たとえ現在ストップしている建設工事が物理的に進んでも、運転開始までの政治的・社会的ハードルは依然として極めて高い状況にあります。

また東通原発についても安全対策工事の完了を目指していた公表時期が、もともとの予定から大きく遅れています。東北電力は、公表を2025年9月までに行う予定でしたが、さらに1年半ほど先送りし、2027年3月ごろを目途にすることを発表しています。これは、敷地造成や想定される津波の再評価と対応策の検討の遅れによるものです。

このように事業者や自治体の思惑通り進まない現実を直視して原子力マネー依存の地域振興策から一日も早い脱却が求められているのではないのでしょうか。

↓9/4 デリー東北 9/12 東奥日報→

大間原発「30年度厳しい」 Jパワー、運転開始巡り

大間原発の建設を進める電源開発（Jパワー）の倉田一秀取締役副社長執行役員（大間現地本部長）は11日、大間町議会大間原発対策特別委員会で、2030年度としている運転開始目標について「全力を尽くすが厳しい」との認識を示した。Jパワーは1年前に6度目の工程延期を表明した一方、30年度の運転開始目標は維持していた。

Jパワーは原子力規制委員会の安全審査に対応中。10年超を要する地震・津波分野の審査にめどがつかず、6月から重大事故対策などを議論するプラント設備審査が始まった。プラント審査で議論した内容を反映し、安全強化対策工事を進めることになる。

倉田氏は「安全対策工事の物量は極めて大きい。プラント審査にも時間がかかっている。30年度の運転開始も、確度の高い工程の全体像が見えていない。全力を尽くして目標を目指す」と述べ、目標時期を延期する可能性を示唆した。

8月に2度目の現地本部長に就いたばかりの倉田氏の発言に、石戸秀雄町議会議長は「就任早々、30年度（の運転開始）が厳しい」という言葉が出ると思いい

大間原発 主な経緯と今後の流れ

2008年5月	着工
11年3月	東京電力福島第1原発事故 本体建設工事が中断
12年10月	本体建設工事が再開
14年12月	規制委に安全審査を申請 (地震・津波審査が長期化)
24年9月	6度目の工程延期を表明
25年3月	プラント審査開始
25年10月	審査説明終了
	↓ 安全強化対策工事終了
	30年度 運転開始?
	倉田副社長「厳しい」

(Jパワー想定)

東通原発工程公表延期 東北電きょう地元で説明

東北電力青森支店の下屋敷聡支店長は3日、青森市で開いた定例会見で、東通原発の安全対策工事完了の公表時期を先送りしたことを、4日に開かれる村議会全員協議会や地区の総代へ東北電が説明する方針を明らかにした。当初今月としていた工程公表を2027年3月ごろと約1年半遅らせたことに関して「（経緯を）丁寧に説明し、ご理解いただくとともに、地域のために何ができるか考えながら対応していく」と強調した。

再稼働に向けて原子力規制委員会の審査を受けている同原発について、東北電は「燃料を全炉心で燃やせる「フルMOX」炉。規制委の山中伸介委員長は7月の視察時に「世界でも類を見ないため、慎重に時間をかけて審査することになる」と述べていた。

下屋敷支店長は「地域の方から（再稼働を）期待いただいている中で、公表延期になったことは重く受け止めている」とし、適切な審査対応や早期再稼働に努める考えを示した。村内29地区の総代への説明を順次行っほか、広報紙を通じて村民へ周知を図る。

一方、洋上風力発電を巡り、大手企業がコスト高を理由に秋田県沖などの事業から撤退したことを受け、東北電を含む3社による共同体が青森県の日本海沖で実施する事業については「計画通り進める方向」と明言。近年の為替の影響や資材高騰などを踏まえ、コスト回収を可能とする運転期間の延長など、国による制度設計の見直し議論が進むことを期待した。



むつ市議会第 265 回定例会

杉浦議員は3項目にわたり、市の政策を質しました

むつ市議会第 265 回定例会は8月 25～9月 18 日の日程で開催されました。一般質問は9月 2～4 日の3日間開催され 10 名の議員が登壇しました。

杉浦弘樹議員は3日に登壇し、(1)金谷公園の整備計画の状況と公園機能の充実へ向けた設備等の設置計画について、(2)今後の公共施設集約化の議論の進め方と対象地域と予定について、(3)脇野沢・夢プロジェクト推進協議会で見えた成果と課題について、の3点について市の方針などを質しました。(1)では日陰が足りないという市民の要望もあり、木陰にベンチを設置し対策を重ねてきたが、今後も公園利用

者に配慮した整備を推進していくとの回答、(2)では当面は川内、大畑地区で、地域住民をメンバーとする協議会を設置し、主要な公共施設の必要性を明確にした上で地域づくりについて協議を始めるとしています。(3)夢プロジェクト推進協議会については幅広い世代の方々が経験や立場を踏まえて地域の未来について夢やアイデアを出し合った意義深い取り組みであったことや一方で公共施設を集約することへの不安や集約ものの運営体制等を心配する意見もあり、こうした点に配慮しながら地域活性化につなげたいと回答がありました。

【今回の議会一般質問に登壇した議員】



◇高橋征志議員（無所属）
学校教育の税外負担の見直しを学校に求める考えは。

▷阿部謙一教育長 学校徴収金は学校と保護者の共通理解の下で行われている。充実した学校環境の実現を支援するため自主的に行われており、尊重すべきと考えている。



◇佐賀英生議員（市誠ク）
今年のクマの目撃と食害の件数は。

▷一戸義則農林水産部長
8月末時点で目撃はむつ地区212件、川内地区65件、大畑地区139件、脇野沢地区15件で、昨年より350件増。食害はむつ3件、川内6件、大畑5件で7件増えた。



◇櫻田秀夫議員（公明・自由）
認知症高齢者への支援の取り組み内容は。

▷斎藤洋一健康福祉部長
認知症の方や家族の見守りや話し相手などの支援を行う「チームオレンジ」の立ち上げを支援しており、今年5月に市内で初のチームが誕生した。



◇住吉年広議員（公明・自由）
7月の津波警報に伴う避難について保育施設からどのような声があったか。

▷菅原典子こどもみらい部長
避難指示に伴う休園、開園の指示内容の明確化や伝達法の改善などの要望があった。年度内を目標に見直しを進めていく。



◇工藤祥子議員（無所属）
海自大湊基地の弾薬庫建設について説明会を開く考えは。

▷山本知也市長 国防の説明をするのは防衛省。説明会を要望するのであれば、防衛省にその声を届ける必要がある。市としては地域が不安に思い、開催を求めれば要望したい。



◇浅利竹二郎議員（自民ク）
避難所でのペットの扱いは。

▷松谷勇総務部長 居室への持ち込みは原則禁止で、屋外での飼育をお願いしている。施設管理責任者などの了承があれば、避難者に十分配慮した上で居室スペースでの飼育を許容している。



◇杉浦弘樹議員（無所属）
公共施設集約化の議論の進め方をどう考えているか。

▷吉田由佳子財務部長 川内、大畑地区で、地域住民をメンバーとする協議会を本年度設置し、主要な公共施設の必要性を明確にした上で、地域づくりについて協議を始める。



◇佐藤広政議員（市誠ク）
金利上昇の財政運営への影響は。

▷吉田財務部長 市債の借入れ利率は、20年度と24年度を比べ、財政融資資金、青森みちのく銀行ともに1%以上上昇している。利子負担については、25年度は前年度比約3千万円増を見込んでいる。



◇濱田栄子議員（無所属）
林業振興について研究機関と連携した取り組みは。

▷一戸義則農林水産部長 青森県産業技術センター林業研究所と協力し、3種類の早生（わせ）樹を植栽した。適した樹種があれば、育成期間の短縮による低コスト化が可能になる。



◇佐藤武議員（無所属）
選挙権行使を保障する施策は。

▷畑中政勝選管委員長 7月の参院選では、マエダ本店の期日前投票所の開始を1時間繰り上げたほか、市内の大学2校と高校2校に「おでかけ期日前投票所」を開設し、計83人が利用した。



一般質問する杉浦議員



脇野沢プロジェクト

むつ市議会 新会派「むつの風」結成 代表は杉浦弘樹議員

10月3日、杉浦、東、大瀧、濱田の4議員は新会派「むつの風」を結成した。東、大瀧両議員は「市誠クラブ」を離脱し、杉浦、濱田両議員は無会派からの参加です。今後の議会活動を充実させる目的で杉浦議員が代表を務めることとなりました。

0～2歳保育料無償化検討 3～5歳の副食費も

むつ市議会

一般質問

むつ市議会は2日、一般質問に入り、4議員が登壇した。市は子育て世帯への経済的支援策として、保育所などに通う0～2歳児の利用料無償化と、3～5歳児の副食費無償化を検討していることが明らかになった。具体的な実施時期は未定。市では現在、18歳以下の

用は約3千万円を見込む。山本知也市長は「拡充の必要性はある」との見方を示し「雇用の確保も課題。子育ての経済的負担の軽減と、所得向上の双方を勘案しながら検討していく」と述べた。

本会議では、政府の「IGAスクール構想」で児童生徒に配備されたタブレット端末の更新に関する財産取得の議案1件が追加提案され、山本市長が提案理由を説明した。（佐藤航）

将来水道料金値上げも

人口減で収入減
資材価格高騰

むつ市議会

一般質問

むつ市議会は3日、一般質問を続行し、4人が登壇した。2001年から維持する水道料金について、吉田和久公営企業管理者は「安全安心な水を供給するには、現在の料金体系のままでは経営が難しい状況になる」と述べ、将来的な値上げの可能性を示唆した。

市上下水道局によると、8月現在の料金は口径20ミ、使用水量20立方メートルの場合税込4675円で、県内10市で5番目に高い水準。使用量10立方メートルでは2番目に安い1826円だという。

人口減で収入が減る一方、資材価格などが高騰。23年度決算では経常収支比率が101・51%と財政的余裕は少ない。厳しい経営環境を見極めながら総合的に検討していく」と述べた。（佐藤航）

大型弾薬庫、2棟は年度内完成、さらにあと4棟も来年度着工予定 陸奥湾上空では無人航空機の操作訓練が予定されています

陸奥湾では、例年「機雷戦訓練（掃海・処分訓練含む）」および掃海特別訓練が実施されていましたが、来年度以降は艦載型無人航空機の操作訓練も陸奥湾上空で実施するという事です。

こうした訓練は陸奥湾という地理・気象環境・地域社会との兼ね合いから、①湾内とはいえ海風の影響や突風、気象急変に伴うリスク、②漁業や養殖業が盛んな湾内での訓練では、漁船との航路調整・航行制限が必須となる、③漁業資源に関する影響として漁業被害、海域占有に対する懸、④低高度飛行や音響影響が発生する、などの影響やリスクが考えられます。



参考写真：艦載型無人航空機

弾薬庫4棟26年度着工

海自大湊 無人機の操作技術教育

防衛省がむつ市の海上自衛隊大湊弾薬整備補給所に新設する大型弾薬庫4棟が2026年度に着工することが29日、分かった。同日公表された26年度概算要求に初めて4棟の工事費が計上された。既に設計は終了しており、28年度までの完成を見込んでいるという。

また、海自が導入する艦載型の無人航空機について、26年度以降、大湊航空基地を使用して自衛隊員の操作教育を行う方針を明らかにした。陸奥湾の半径約5・6キロ、300～900メートルの空域を飛行エリアとし、技術の習得を図る。

大型弾薬庫は、先行して着工した地上覆土式の2棟が25年度中に完成する予定。新設する4棟について、同省は施設の詳細や保管する

る弾薬の種類などを明らかにしていない。

政府は、他国領域のミサイル基地などを破壊する反撃能力（敵基地攻撃能力）にも用いる長射程ミサイルなどの保管先を増やし、戦闘継続能力を強化することを目的に、全国で弾薬庫の増設を進める。26年度概算要求には整備費692億円を盛り込んだ。

このほか海自大湊関連では係留施設の更新、旧重油所の配管撤去に向けた調査などを予定している。（加藤景子）

むつ中間貯蔵施設への使用済み核燃料搬出入に関わる事業者の

去る7月7日にむつ中間貯蔵施設に関わる搬出入事業者（東京電力、日本原子力発電、リサイクル燃料貯蔵）が青森県およびむつ市に提示した使用済み核燃料搬出入の「中長期計画」について、その杜撰さや問題点を指摘しながら「核の中間貯蔵施設はい

らないI下北の会」（野坂庸子代表）がむつ市長宛に提出していた要請や質問に対して回答を得ました。

ほとんどの回答は問題点の本質に答えるものではなく到底納得のいくものではありませんでしたが、以下のとおりお知らせいたします。

要請・質問事項	むつ市回答
本中長期搬入・搬出計画について市民に対する説明会の開催を国および事業者を求めること。	令和7年9月18日のむつ市議会使用済み燃料中間貯蔵施設調査検討特別委員会において、事業者が参考人として出席し、市民を代表する委員の皆様に対し、事業者から直接ご説明いただいたものと認識しております。
むつ市が主催して、本件をテーマとした市民対話集会を企画し、広く市民の意見を聞く機会を設定していただきたい。	令和7年9月18日のむつ市議会使用済み燃料中間貯蔵施設調査検討特別委員会において、事業者が参考人として出席し、市民を代表する委員の皆様に対し、事業者から直接ご説明いただいたものと認識しております。また、日頃より様々な場面で中間貯蔵施設に関する意見をいただいております。重要なことは、市民の皆様方の御意見の収集や御質問への回答をしっかりと行い、いただいた御意見と真摯に向き合い、中間貯蔵施設に関する不安や懸念の解消に努めることが大切であると認識しております。
事業者から中長期計画の報告を受けた際に福島原発からの搬入も想定していることに対し、市長はこれを是認する姿勢を示していますが、昨年の安全協定をめぐる議論の中で事業者側は福島原発からの搬入については「廃止措置工程全体の中で検討して行く」としていた筈ですが、今回の発言はこの点を質した上だったのでしょうか。	東京電力福島原子力発電所からの使用済み燃料搬入につきましては、事業の受け入れ当初から計画されていたものであり、原子炉等規制法に基づく厳格な4審査のもと、確実な安全性が確認された使用済み燃料が搬入されるものと認識しております。
また、福島原発からの搬入について「安全性の担保」という市長の発言について、どのような形で担保できるとお考えなのかを伺います。	使用済み燃料の搬入にあたっては、原子炉等規制法に基づき原子力規制委員会が定める安全基準に適合しているかどうか、詳細な審査と確認が行われます。その結果、確実に安全性が確認された使用済み燃料でなければ、リサイクル燃料備蓄センターに搬入されることはありません。したがって、安全性が十分に担保されたもののみが、搬入の対象となる仕組みとなっております。
また、このような形で福島原発の廃炉事業に市が関わることは、今後なし崩し的に様々な廃炉核廃棄物の受入の発端となるリスクについてもどのようにお考えなのかお聞かせください。	リサイクル燃料備蓄センターは平成17年にむつ市、青森県、東京電力株式会社、日本原子力発電株式会社の4者で締結した立地協定によって、東京電力ホールディングス株式会社及び日本原子力発電株式会社の2社の原子力発電所から発生した、新しい燃料に生まれ変わることができる使用済み燃料のみを貯蔵する取り決めになっております。
事業者の計画の搬出必要量、再処理工場への搬入可能量の具体的数値は、「全て想定」であり、計画自体、根拠及び実現性と説得力のないものと考えますが、市長の見解を伺います。	事業者によりますと、今回の中長期的な搬入・搬出計画につきましては様々な変動要因がある中で、あくまでも現時点での検討状況についての報告との事でありです。事業者からは、5,000トンの貯蔵に向けてさらに検討を行い、まとまり次第、改めて報告すると伺っております。

「中長期計画」に対する、むつ市への質問状への回答がありました

今回の RFS に関する搬出・搬入計画が副題で「複数検討のうちのひとつ」としており、現段階でこの計画の信ぴょう性および現段階で一例を示しただけとも受け止められますが、この点をどのように認識しているのかお伺いします。	前述の回答と同様となります。
中間貯蔵施設は再処理前提の施設であるとの認識と考えますが、貴職は再処理工場が計画通り 2026 年度中に完成、稼働すると考えておられるのでしょうか。また、仮に稼働時期がさらに先延ばしになった場合、何らかの対応をお考えなののでしょうか。	今年 2 月に閣議決定された第 7 次エネルギー基本計画において、核燃料サイクルの中核となる六ヶ所再処理工場の竣工は、必ず成し遂げるべき重要課題であると位置付けており、同工場の竣工に向け、審査対応の進捗管理や必要な人材確保など、官民一体で責任を持って取り組むと明記されていることから、竣工に向け確実に進められているものと認識しております。
今回の中長期計画では RFS 社は 2064 年以降、10 年にわたり年間 300 トンずつを再処理工場へ搬出する計画となっていますが、この計画は日本原燃や電事連そして国と調整、確認済みなのかどうか承知しているのかどうかをお伺いします。	事業者によりますと、報告にあたっては、国から指導を受けていたこともあり、青森県及びむつ市に報告する旨を、事前に国の担当課に伝えていたとのことです。また、この計画の検討に当たっては、日本原燃株式会社との間で合意している考え方に基づいたものとの事ではありますが、あくまでも様々な変動要因がある中で、現時点での検討状況についての報告を受けたものであります。このため、約束された最終貯蔵量 5,000 トンに向けて、更なる必要な調整や詳細の検討が行われるものと認識しております。
貴職は第 2 棟目の建設計画を急がせているように思われますが、計画が明らかになる時点では、原子力環境も大きく変化していると思われますが、その時点で市民にあらためて建設の是非を問う用意はあるのでしょうか。	2 棟目の建設につきましては、平成 16 に施設立地への協力要請あった際、東京電力と日本原子力発電両社による貯蔵量は 2 棟で合計 5,000 トンである旨の計画が示され、それを基に本事業への協力を判断し、本施設と共に共生する市の将来像をこれまで描いてきております。また資源に乏しい我が国が長期的な視点に立ってエネルギー安定供給を図ることを考えた場合、化石燃料に過度に依存した状況を脱却するためには今後も原子力の利用が必要不可欠であり、核燃料サイクル推進の必要性は、震災前から変化がないものと考えております。
今回の中長期計画で 4,500 トンを 2 事業者よりの搬出としていることから、従前より話題となっていたむつ施設の全国共同利用構想はあり得ないと考えますが、その判断は電事連、国と共有したものなのか承知しているのでしょうか。	最終貯蔵量はあくまで 5,000 トンであり、その貯蔵に向けて進められるものと認識しております。リサイクル燃料備蓄センターのいわゆる共用化については、これまで繰り返し公の場で述べてきたとおり、案も含めてそうした計画自体が存在していないものと認識しております。
再処理された後の MOX 燃料は使用済み核燃料の発生元がそれぞれ自らの発電所で利用することとなっていると承知していますが、現時点ではいずれの搬出元の東京電力、日本原電ともプルサーマル計画を描き切れていない現状かあります。むしろ、それどころか原発の再稼働自体もメドがついていません。果たして本当に使用済み核燃料を再処理する意思が見込めないと考えますが、貴職の判断をお伺いします。	第 7 次エネルギー基本計画において、使用済み燃料を再処理し、回収されるプルトニウム等を有効利用する核燃料サイクルの推進は、一貫して、我が国の基本的な方針とされていることから、適切に再処理が行われるものと認識しています。

ほどよく忘れて生きていく

誠実な人ほど、つらい記憶を
忘れないようにします。でも……。
その記憶の「輪郭」を少しぼかしたり、
「色」を少し薄めたりできれば、
心の中に息する場所が生まれます。
ざわつく後悔や人間関係を
ほんのひととき手放し、心を休めて。



【作品情報】

京都にある、小さなクリニック。

ここで診察にあたる91歳の心療内科医の言葉が話題になっています。日々、訪れる患者さんに届けているのは、からだと心がラクになる処方箋。たとえば診察後、おきまりの「お大事に」の挨拶ではなくて、「ご自分をお大事になさってくださいね」という言葉で送り出す藤井英子医師。患者さんはハッとした顔をして、それまで後回しにしてきた自分を思うと言います。

人づきあい、老いとの向き合い方、健康管理など、生きることのあらゆることについて、「これは忘れていい」「これは大切に」という切り口で71の生き方のヒントをお届けします。

若々しい心とからだで生きるコツが満載の1冊です。

藤井医師は91歳のいまも、毎日バスと徒歩で通勤し、スマホも使い、ちゃちゃっとパソコン作業もこなし、ブログでの発信もしています。そんな藤井医師の元気の秘訣は「さっぱりと生きること」。「いやなこと」「ちょっとした心のひっかかり」「執着」は忘れて、そのぶん、本当に大切にしたいことに、心を注ぐ。若々しい心とからだで生きるコツが満載の1冊です。

自分を大切にする71のヒント

「人間関係」はほどよく忘れる

- 01.「折り合い」は忘れる
- 02.「みんな仲よく」は忘れる
- 03.「誰かの意見」は忘れる
- 04.「比べる」は忘れる
- 05.「してあげる」は忘れる
- 06.「苦手な誰か」は忘れる
- 07.「親だから」は忘れる
- 08.「家族だから」は忘れる
- 10.「わかってくれない」を忘れる
- 11.「迷惑かけたくない」を忘れる
- 12.「私さえ我慢すれば」を忘れる
- 14.「これまでのやり方」は忘れる
- 15.「完璧」を忘れてみる

「自分をいたわる」は忘れない

- 16.ほどよく「忘れる」をよしとする
- 17.「本当の原因」を見つける
- 18.いつでも「自分」に敏感になる
- 19.「自分でよくなる力」を引き出す
- 20.「動く」ことでやる気を出す
- 21.「同じリズム」をつくる

- 22.なにはともあれ「歩く」
- 23.とっておきの「靴」を選ぶ
- 24.自分の「健康法」をつくる
- 25.お金より「筋肉」をためる
- 26.「朝ごはん」をきちんと食べる
- 29.からだの「声」を聞く
- 30.「命の入り口」を健康に保つ
- 33.眠れなくてもよしとする
- 34.自分を責めない
- 35.「隠れストレス」を見つける
- 36.「小さな不調」に慣れない
- 38.「逃げ道」をつくっておく
- 39.きちんと「脳」を休める
- 40.「あるものだけ」を見る
- 41.「医者」と「薬」は上手に使う
- 「過去」はほどよく忘れる
- 43.「経験」を忘れる
- 44.「よかった過去」も程よく忘れる
- 45.「失敗」は動いて忘れる
- 46.「心配」もほどよく忘れる
- 47.「不幸せ」は適度に忘れる

- 48.「貧乏籤を引いた過去」は忘れる
 - 51.ときどき「時間」を忘れる
 - 52.「悔やむ心」を忘れる
 - 53.人への「負けん気」は忘れる
 - 54.「白か黒か」は忘れる
 - 55.「競争」は忘れる
 - 56.「自己犠牲」は忘れる
 - 「小さな挑戦」は忘れない
 - 57.やりたいこと「だけ」をやる
 - 58.「呼ばれた名前」で呼んでもらう
 - 60.「お願いします」を気持ちよく言う
 - 62.「経験」にお金を使う
 - 63.自分で「調べて」自分で「決める」
 - 64.「最新機器」を触ってみる
 - 65.誰かへ「贈り物」をする
 - 66.「根っこに関心事」を見つける
 - 67.小さな「お役目」を果たす
 - 68.「選んだ道」を肯定する
 - 70.いつでも「笑える」準備をしておく
 - 71.「与える」ことで「与えられる」
- (目次より抜粋)

【編集後記】悪い癖がついてしまったような気がする。長い文章や資料を読むのが億劫なときにパソコンの要約機能を使って、済ませて全部に目を通したことにしてしまっている。また、自分の考えをまとめたいときにもパソコンのAI機能に頼ることが多

くなった。この「フォーラムしもきた」の編集も然りだ。年齢と共にだんだん弱まっていく思考力をごまかしているような気がする。文明の利器を使いこなしているようで、その実、パソコンに振り回されて支配されている。そんな気がする日々である。

◆ 本年 8 月 15～17 日、戦後 80 年を機に故郷の戦争の傷跡を検証する記事をあらためてデーリー東北紙がインターネット配信を行いました…記事は 2015 年 8 月に掲載のされたものです。（年齢・肩書は当時）

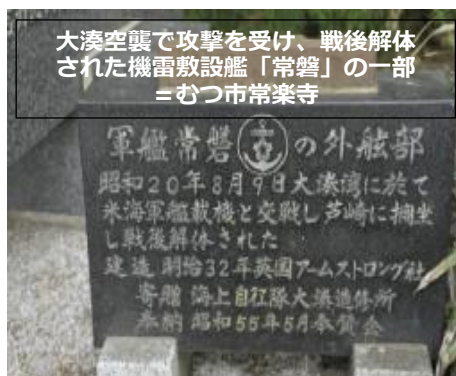
【大湊空襲 日本海軍最後の海戦】

下北半島は太平洋戦争中、津軽海峡の防衛強化のため要塞化が進められた。

終戦直前の 1945 年 8 月 9 日。大湊港を米空母艦載機が襲った。「日本海軍最後の海戦」とも称される大湊空襲だ。停泊中だった機雷敷設艦「常磐」（排水量 9700 トン）、駆逐艦「柳」（1500 トン）が爆撃を受けた。大量の機雷を積載した艦隊は一撃を受けただけで大爆発を起こす。旗艦・常磐の艦長は、数時間前に索敵機が飛来したことから空襲を確信、11 隻に全ての機雷投棄を命じて被害の拡大を防いだ。だが、戦死した乗組員は 129 人に上った。「ドカーン、ドカーンと爆弾の水柱が高く上がり、その度に家が揺れて棚から物が落ちた。生きた心地がしなかった」。自宅の窓から空襲を目撃した男性（82）は振り返る。

遺体は大湊地区の常楽寺に集められた。しかし、盛夏で遺体の傷みが早い上、火葬場の設備は小さく対応できなかった。戦死者は畑に掘った穴に幾重にも重ねられ、丸 3 日をかけて荼毘に付された。ほとんどは下北にゆかりのない、

遠く九州、四国の若者らだった。引き取り手がない遺骨はカマス（むしろ袋）6 個を数え、火葬場に安置された。終戦から 7 年後、住職をはじめ関係者が協力し、境内に慰霊碑を建立、ようやく遺骨を納めた。大湊空襲の犠牲者に限らず、地域の戦死者、戦病死者を慰めることにした。攻撃を受けた常磐は海岸に座礁、戦後に解体されたが、舷側の破片が記念碑として慰霊碑脇に置かれ、平和になった海を眺め続けている。



海峡防衛の要衝・下北には、戦争の痕跡が数多く残る。大湊港の棧橋跡にある記念碑もその一つだ。終戦から 1 週間後、労働から解放され祖国へ帰る朝鮮人約 3,700 人を乗せて大湊港を出港した浮島丸（排水量 4730 トン）。針

路を舞鶴港に変更して航行中に突然、同港沖で爆発し、海軍の乗組員を合わせ 549 人が犠牲となった。自爆説もあったが、日本の海岸沿いの航路や、兵士の犠牲などを勘案し、現在では触雷したものとみられている。2012 年、地元有志らが後世に伝えようと記念碑を建立した。

海上自衛隊樺山送信所は、戦時中の海軍滑走路を転用した施設。アンテナが林立し、広い敷地が滑走路の名残をとどめる。

青森県立大間高校の近隣には、30 センチ砲 2 門を備えた大間崎砲台のコンクリート製砲台跡が、青々とした木々に埋もれ、風雨にさらされながらも、かつての威容をうかがわせている。

「下北の地域文化研究所」の斎藤作治所長は、戦跡、戦争遺産について「戦争の狂気と悲惨さを物語る最大級の語り部だ」と強調。

「無謀な戦争をした当時の日本政府の判断ミスや、それを止めさせることができなかった国民の反省材料として存在している」と意義付けた上で、保存や平和教材としての活用を訴える。

【風間浦・甲崎 敵艦襲来に備えた魚雷射堡】

津軽海峡を望む風間浦村下風呂地区の甲（かぶと）岬。切り立った崖に、四つの大きな洞窟跡が並ぶ。長い間、大型爆弾を艇内に内蔵して敵艦に突っ込む、ベニヤ製の特攻艇「震洋」の基地だと見られていた。

「戦争が終わった後、工事していた軍の偉い人が何度か訪ねてきた。懐かしいんだそうだ。長野の人。秘密だけど、魚雷を入れる穴だったって」。初夏の船揚げ場の岸壁に腰掛け、海を眺めていた作

業服姿の男性（77）は、日差しに目を細めて語り始めた。

地形的に攻撃を受けにくい大湊港は明治以降、水雷艇や駆逐艦が配備され、ドック、修理工場も備えた一大軍港となった。大戦下には巡洋艦もいかりを下ろし、大湊警備府として北洋ににらみを利かせた。大湊から北上、尻屋から大間に至る北部海岸一帯には、砲台や海中音波探知施設など軍事施設が設けられ、海峡を往来する敵艦に備えていた。

大戦末期、軍は本土決戦を不可避として、上陸した敵を迎え撃つ陣地や地下壕を各地に構築。太平洋と日本海を結ぶ要衝に位置する同村では、大勢の軍人と工事員



が、海岸に洞窟を掘るという異様な作業が始まっていた。22年前、下北の地域文化研究所（むつ市）の斎藤作治所長らが、洞窟の目的を特定しようと大湊海軍関係者らから聞き取り調査を実施。その結果、震洋の格納壕と推定、これまで通説となっていたのだ。その後、青森空襲を記録する会（青森市）が下北、津軽、渡島の3半島に軍が配置した兵器、陣地などの地図を発見。甲岬に付けられた記号から、同じく本土決戦兵器の特攻潜水艇「蛟竜（こうりゅう）」の基地だと指摘した。

下風呂地区の洞窟の近くに居を構える男性は「（自分は）7歳ぐらいだった。朝鮮の人も集落の道

を歩いていたが、洞窟は秘密（の施設）だから、来たのは兵隊だけだ」と話す。・

大戦時、大間崎に軍事物資を運ぶ路線として計画された大間鉄道。工事には、朝鮮半島からの作業員が大勢、鎚を振るった。

下風呂地区の集落の山手には宿泊所が設けられていたため、作業員をよく見掛けたという。話してくれた男性は、好奇心旺盛だった子どもの頃に帰ったように「あしたの朝は潮が引く。（洞窟まで）行けるぞ」と、にっこり笑った。

ごつごつした岩で足場の悪い海岸を歩き、洞窟にたどり着くと、岩をくりぬいた穴が4カ所。いずれも直径5㍍ほど。うち一つに

は、くっきりとした測定器具「ノギス」の後が縦に幾筋も残る。波打ち際までなだらかな傾斜を作り、作業を中断した跡もある。

しかし、男性の証言を受け、地域文化研究所（むつ市）の斎藤作治所長が改めて地図を確認したところ、その記号は初めて「魚雷射堡（しゃほ）」と判明した。魚雷を洞窟に隠し、レールを滑らせて発射して敵艦を狙う構築物だった。戦争末期には、日本の沿岸各地に設けられ始めていた。斎藤所長は「これは新発見だ」と、地図を凝視して興奮した様子。海峡に面するこの戦争遺産は70年もの間、真実を隠し続けていたのだ。

【大間鉄道 「幻」の鉄道に知られざる強制労働の歴史】

むつ市から風間浦村、大間町に至る国道279号の海岸沿いを車で走ると、山手の所々にコンクリート製のアーチ橋、橋桁といった巨大な遺構が現れる。未開通で「幻」の冠が付く、大間鉄道の痕跡だ。日中戦争勃発と同年の1937年、下北駅（むつ市）と大間を結ぶ計画で着工したが、物資不足により工事が中断し、43年に未完成のまま放置された。下北半島での鉄道の建設は21年に開通した大湊線（野辺地～大湊）に始まり、軍事物資を大間に輸送する必要性から大間鉄道へと続いた。敷設には大量の作業員が必要だった。そこで、海を渡った大勢の朝鮮人が半ば強制的に働かされていたことは、あまり知られていない。「朝鮮半島に行って、50人も60人も船で連れてきたと聞いた。下関から汽車で下北まで移動するのが大変。三沢や大湊の工事も割り当てられたそうだが」当時、建設会社に勤める父が、軍属として下北・上北地方を担当していたという県南地方の関係者は、こう証言する。

「戦後に補修されたのだろう。

表面が滑らかだ」「下北の地域文化研究所」の斎藤作治所長は、見る人を圧倒する巨大なアーチ橋を見上げて解説した。教員OBで、これまで戦争に関わる資料の収集や、当時を知る関係者への聞き取りを地道に重ね、`闇`の郷土史も掘り起こしてきた。人権尊重も大きなテーマだ。

終戦時、下北にいた朝鮮人は4千人程度と推定されている。大湊海軍施設部の徴用工、大間鉄道の作業員、猿が森炭鉱の炭鉱員だったという。窓が鉄格子の宿泊所に押し込められ、連日過酷な重労働を強いられた作業員を、地元住民はタコと呼んだ。その由来は「自らの足を食べるように借金を返せない」「タコつぼに入ったように出られない」「もっこを担ぎ、肩がタコのように硬くなる」など諸説ある。日本人作業員とは待遇に大きな差があり、非人道的な扱いを受けた朝鮮人労働者。「脱走者を現場監督がリンチする一方、命からがら逃げてきた人を住民が逃がしてあげることもあったという」。斎藤さんは苦渋の表情を浮かべる。

多くの労働力を投じた大間鉄道は、39年に下北―大畑間18㍍が開通。大畑以北も29㍍のうち16㍍の路盤が完成していたが、結果として完成を見なかった。幻の鉄道を象徴するアーチ橋は70年以上も放置されて傷みが目立つものも多い。

一方で、戦後に補修されたり、風間浦村がメモリアルロードとして約1億2千万円を掛けて修復、憩いの遊歩道として活用されている遺構もある。遊歩道の銘板には「太平洋戦争に突入してからは、大間の軍事施設のための重要路線」などと紹介文が刻まれている。だがそこから、血と汗が染み込んだ歴史を読み取ることはできない



工事途中で放置された大間鉄道のアーチ橋